

夫の転勤で、岩手に転居したばかりの頃。

夫の同僚宅のホームパーティに夫婦揃って招待された。だが夫は同僚達と話し込み、私は蚊帳の外。初対面ばかりの空間に一人放置。見知らぬ土地で苦労も多く、相談できる友達もおらず、鬱気味だった私は遂にストレスも極限に達し、黙って同僚宅を抜け出し帰った。けれどすぐに後悔。同僚宅は街から離れた丘の上。既に22時を過ぎ、街灯もなく真っ暗。既にバスもない。家までは約20キロ。到底歩いては帰れない。しかも衝動的に飛び出し、バッグもスマホも同僚宅に忘れてきた。蒼白しつつも、強情な私は意地でも戻りたくなかった。夜の闇を恐怖に脅えて歩いていると、軽トラが停まり、おじいさんが顔を出した。

「どうしたの？送ってやるから乗りなさい」

見知らぬ他人の車に同乗するなんてあり得ない！警戒心を総動員させて即座に断った。

だがその後も、行き交う車は一台残らず全て停車し、私に同じ言葉を投げかけたのだ。恐怖と疲労で限界だった私は、とうとう十何台目かの車に乗りこんだ。若い夫婦と娘、そして大きな犬が乗ったファミリーカーに。

無事に家まで送って頂き、丁重にお礼を告げ、是非お返しをさせて下さいと懇願すると、「今度あなたが困ってる人に出逢ったら次は、あなたの番だ。助けてあげて。それがお返し」

父親はそう笑い、鮮やかに車は走り去った。

『知らない人の車に乗ってはいけません』

それも正論だ。だけど世の中悪い人ばかりじゃない。困っている人を放って置けぬ心優しき人達と、私は実際に沢山ここで出逢った。

大人になるにつれて疑心暗鬼になり、殺伐とした社会に揉まれ、心は渴いていった。でもこの寒い北国へ来て、温かい善なる心を信じてみたくなった。誰かに優しくしたくなった。まずは尤も身近な人から。突然消えた妻に焦り、心配している夫に。

『情けは人の為ならず』

善行は巡り巡って、自分にもイイコトが返ってくるかも。・・・とちよつぱり期待して。